

Ⅳ 研究のまとめ

2年次の研究は1年次の評価や反省を踏まえているため、2年次の取組やアンケートから本研究の成果と課題、仮説の検証結果、これからの課題についてまとめる。

1 成果と課題

○成果

- ・生徒本人の思いや背景に抱えているものなどをイメージしながら生徒の「今」を考え、どのような姿になって欲しいか、そのための方法等について教員間の対話を基に指導に当たることで一人一人の成長、「未来」につなげることができた。
- ・背景要因を考えたことで、一見できることが多く見られる生徒でも、これまで生きてきた中で分からないことや不安なことなどが積み重なっており、そのような生徒に合った指導をする必要性があることが改めて分かった。
- ・普段あまり目立ちづらい生徒にスポットライトを当てたことで、他の生徒にも応用できるような指導について検証することができた。
- ・面談を通して、自分の気持ちや考え、悩みなどを表出できるようになった。また、振り返ることが考えを広げるために有効だった。
- ・日々の何気ない会話や、常に見守っている姿勢を示すことで、自分の気持ちを話しても大丈夫だと安心感をもたせることにつながった。
- ・グルーピングや活動の工夫をしながら様々な経験ができるようにすることで、できること、得意なこと、生徒同士でコミュニケーションをとることが増えた。
- ・行事では、普段関わりの少ない教師や友達と関わり合いながら意欲的に取り組むことができた。
- ・できることを称賛されたり、感謝されたりする経験が、自信をもって活動することにつながった。

○課題

- ・事例生徒が一名だったため学年内で意識して取り組めたが、本校の規模を考えると、生徒を抽出する今回のような研究を全生徒に対して行うことは難しい。アプローチの仕方や様子などを共通理解する時間の確保が課題である。
- ・いろいろな経験の幅を増やしていくことが必要だと分かっているが、一個人の工夫や努力では難しい。検討する場や方法について組織的に考えていく必要がある。
- ・慣れた教師や友達以外とのやり取りを今後経験させていく必要がある。
- ・自己理解が十分に進まなかった事例もあった。
- ・可視化された目標があるとよい。また、自分の考えを最大限実践できるようになることが今後の課題。そのためには、自主的に活動できるよう、教師側がそのような場面を設定する必要がある。
- ・本人の意思を尊重しながら新しい経験を積み重ねられるかが課題。できるようになったことを新しい環境になったときにもできるかを計画できるとよい。

2 研究仮説の検証結果

研究仮説①

生徒数、職員数が多く、教科別の学習が中心であるあいの里高等支援学校において、生徒の課題やその背景について職員間で話し合い、指導目標、指導内容・方法、指導場面について明らかにし、共通理解のもと各教科等で指導をすること、また、それを評価、改善することで、各教科等の学びを支え、生徒の日々の成長につなげることができるのではないか。

※職員間の連携（１～２年次を通した中心的な取組）



○アンケートからも、職員間の対話を大切に指導に当たったり日々の様子や変容について評価したり意見交換を行うことが有効であることが分かった。また、そこで得た情報を基にそれぞれが担当している授業で指導や関わりの工夫をするなど、生徒に関わる教師が日々の実践を積み重ねることによって自立活動や各教科等における学びの充実、日々の成長につなげることができた。

研究仮説②

なりたい自分、そのために必要なプロセスについて、目標や内容の設定、日々の取組の振り返り等を生徒本人が行ったり教師と一緒に考えたりすることで、その目標に向けて本人が努力したり、日々の生活に対する考え方や取り組み方に変化が表れたり、自己理解が進みよりよい進路選択につながったりするなど、本人が主体的に自立を目指し、自らの学習上、生活上の困難を主体的に改善、克服するための力を養うことができるのではないか。

※職員間の連携を土台に、生徒主体の学びにつなげる（主に２年次の取組）



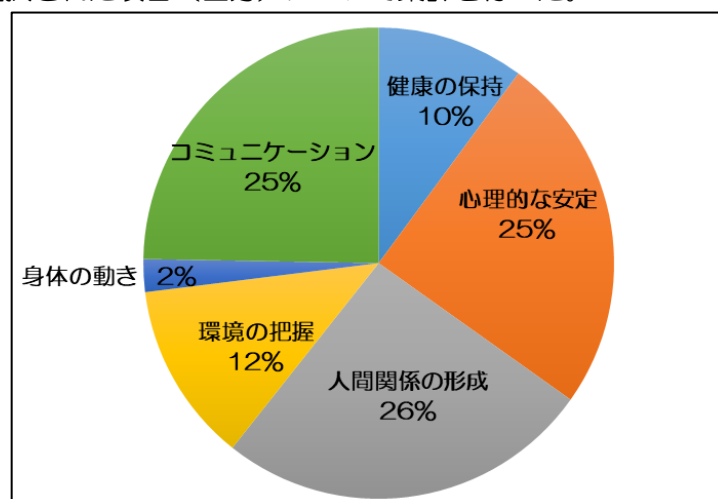
○生徒との対話の中で、なりたい自分や課題、目標の達成方法や課題の改善方法等について生徒と考えること、そして、それらを実践する場を教師が設定したり生徒に伝えたりすることで、生徒の言葉や行動、考え方などに変化が表れた。その結果、自分のことを伝えられるようになったり自己理解が進んだりする生徒が増えた。

○自己理解や主体性の発揮において不十分だった事例もあり、アンケートからも面談の場や方法、協働の場・実践の場の充実・発展については、今後の課題として明らかになった。

3 これからの課題

(1)「自立活動の目標の達成に必要な項目の選定」について

全事例の「個別の指導計画（校内研究用）」において、自立活動の目標を設定した後、指導内容や指導方法を導くために選択された項目（区分）について集計を行った。

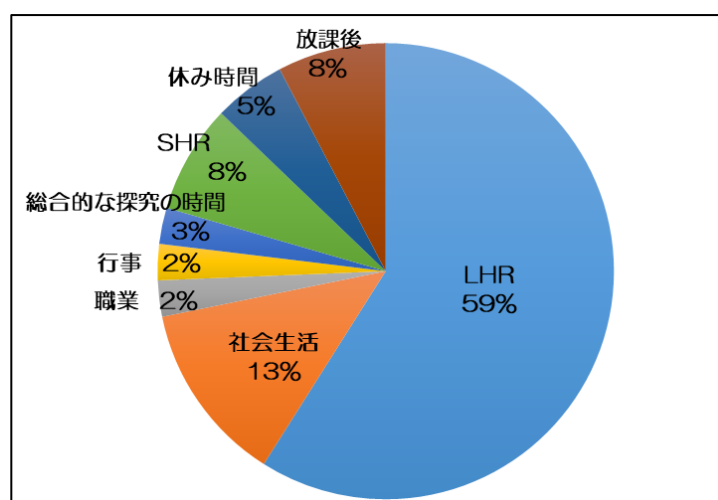


○少しの差ではあるが「人間関係の形成」が1番多く、次いで「心理的な安定」と「コミュニケーション」が多い。今回の事例の多くは、主にこれらを関連付けながら指導内容や指導方法を考え、最終的に自立活動の目標の達成に向けて指導を行っていることが分かった。

→自立活動の目標を達成するためには、人との関わりの中で、情緒の安定を図ったり、学習や生活に向けて意欲を高めたり、言語等によるやり取りを行うことが有効だと考えることができる。

(2)「個別最適な学び」について

全事例の「個別最適な学び（教師視点：個人面談）」で設定された指導の場について集計を行った。

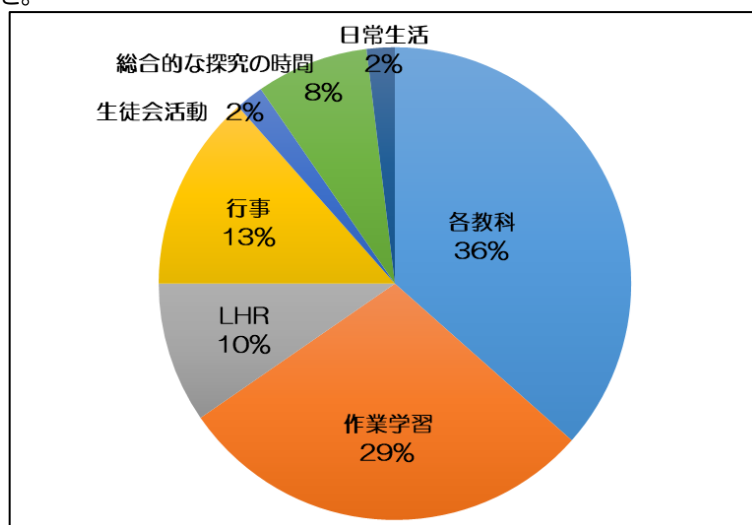


○生徒自身が目標を考えたり、日々の取組について振り返ったり、自己理解を進めたりするための面談については、LHR、次に社会生活の時間で面談を行っていることが多い。また、休み時間や放課後なども活用していることが分かった。

→アンケートでは、教師との関係を深める場、生徒の思いを言語化する場として「面談」が有効だという意見が多くあった。しかし、指導体制や必要性が高い場合などにおける面談の在り方や持ち方について困っているなどの意見もあった。また、LHRで行うと集団づくりにかける時間が少なくなってしまうなどの意見もあることから、「面談」の場や方法等について、検討が必要だと考える。

(3) 協働的な学びについて

全事例の「協働的な学び（教師視点：教育活動全体で取り組む自立活動）」で設定された指導の場について集計を行った。



○「各教科」の時間が一番多く設定された。その他は、「日常生活」を除くと、「作業学習」、特別活動である「LHR」、「行事」、「生徒会活動」、「総合的な探究の時間」であった。

→アンケートからは、協働的な学びについて肯定的な意見が挙がった一方、学年や学科を超えた活動、地域との関わりが必要だという意見が多くあった。しかし、各教科に関しては学級を中心とした学習グループで行っており、その中で学習グループ以外の学科、学年外や地域の方と関わる活動は計画、実施することに難しさがある。今後、「作業学習」、「特別活動（LHR、生徒会活動、学校行事）」、「総合的な探究の時間」を中心に、どのように協働的な学びを充実・発展させるか検討が必要だと考える。

